

第 18 節 沿岸釣漁業

1. 沿革

沿岸釣漁業は、昔から県内一円で自由漁業として多くの漁業者が行ってきた。

金額ベースで見ると、沿岸漁業の占める割合は全国で約12%（1996・平8年）これに対して本県では金額で10%、就業者で30%を占める（表1）。ただ漁獲量では3%程度であらうこれは本県の沿岸釣漁業が、高級魚を対称にしているためと考えられる（表2）。

本県の釣漁業は古く「海幸、山幸」の神話に始まり、開聞の「玉乃井」の史跡に連なる。鉄針で兄弟神の喧嘩になったように、漁業紛争は古来からの伝統のようである。現在、遊漁者の関心の強さも神代譲りというべきかもしれない。漁具の技術を記録したものは本県では1883（明16）年の全国水産展覧会で展示された『鹿児島県漁業説略¹⁾』を嚆矢とし、以後多数作られた。

まず1903（明36）年の報告²⁾から漁場を見ると、

かつお漁場は黒潮の影響する海域すべてが漁場である。江戸時代（1603～1868）の沿岸漁場は、次第に沖合、遠洋へと移動。七島灘、三島、宇治群島、種子・屋久島、大島、佐多の各海域に広がった。その他に曳縄漁業があり、漁場往復の途中に利用された。

本県のぶり漁場は非常に広く、漁法も所により多種多様に分かれ、概ね6種がある。撒餌釣、大敷網、掛網、刺網、延縄、幌曳などである。延縄、幌曳は日置郡で盛大であったといわれる。延縄は薩摩郡西方、阿久根、長島の下門野で操業していた。

たい漁場は志布志湾、鹿児島湾口、開聞岳周辺、南薩西薩沿岸、甕島沿海、不知火海、長島周辺で、県内一円がタイ、およびレンコダイの延縄漁場として記録される。ほとんどが地先で操業している。一本釣は志布志湾、種子島周辺、桜島周辺、笠沙沖合、串木野沖合、上甕村の一部に限られる。特殊な技術を要したのか、延縄の方が能率的であったのか不明だが、全県一円にないのは面白い。

アジ、サバの手釣漁場は不知火海を除く県本土沿岸、甕島周辺、屋久島沿海の地先沖合などが漁場である。志布志、谷山、東加世田、串木野、阿久根や長崎県島原の漁業者が、山川、穎娃に根拠を移し、鹿児島湾口、佐多沖合、開聞岳沖合を漁場に150隻以上が出漁。谷山、指宿、山川、穎娃、および串木野から、屋久島の宮之浦、一湊、永田を根拠に同島沖合、硫黄島近海に毎年120隻以上が出漁した。また1879（明12）年から100隻の漁船が毎年春に朝鮮近海に出漁していた。

いか漁場は「沿岸の浜浦一として之が釣獲を試みざるの地なし」といわれ、特に開聞岳東西沖合、甕島の北端は好漁場で、著名な山川、阿久根などの干しスルメはこの漁場のものであった。

バショウカジキ（秋太郎）漁場は穎娃村大川（10^キ沖合）、串木野（甕島西南沖合および師との海峡）、西市来村（地先沖合および久多島周辺）、小根占村（地村沖合より佐多近海）を根拠に地先沖合を中心に延縄、刺網の漁法で操業し、独特の発展をした。

ふか漁場は志布志湾、佐多村、穎娃村川尻、西市来村、串木野村、上甕村平良村の地先または沖合で延縄で漁獲した。

この時代は動力船の活躍もなく、沿岸資源は比較的安定していたが、遠洋漁船の進出、動力船、各種省力機械の出現、養殖種苗の採捕などで回遊魚群が大量漁獲されるようになり、減少の止むなきにいたった。カツオ、マグロ、ブリ、サバ、イワシ、トビウオ、瀬物など非常に多種類に及ぶ。現在では残された魚族を漁具の改良工夫で多く獲ろうと努めている状況である。

表1. 沿岸一本釣

単位：100万円

1996(平成8)年沿岸釣漁業生産額表					漁業者就業者の地位 1997(平成7年)			
漁業名称	全国計	本県計	割合	備考	全国	本県	構成比	備考
沿岸漁業合計	1,462,765	32,417	0.02	全国比	324,886	11,936	0.04	全国比
沿岸かつお一本釣	3,695	148	0.05	一本釣構成比	1,104	24	0.01	一本釣構成比
沿岸いか釣	54,594	515	0.16		587	42	0.01	
さば釣	726	2	0.00		13,308	360	0.10	
その他釣	49,826	1,777	0.55		35,753	2,796	0.79	
ひき縄釣	14,880	322	0.10					その他釣計上
沿岸まぐろ延縄	22,375	113	0.04		1,348	16	0.00	
その他延縄	34,881	328	0.01		9,541	287	0.08	
本県沿岸計	180,977	3,205	0.02	全国比	61,641	3,525	0.06	全国比
構成比	0.12	0.10			0.19	0.30		

農林水産統計 漁業就業者 1997(9次センサス)

表2. 年次別一本釣漁獲量推移

単位：ト

区分	県計	一本釣	割合	%
1992 H・4	139,051	4,419	0.0318	3
1993 5	149,840	4,284	0.0286	3
1994 6	138,250	4,644	0.0336	3
1995 7	129,794	3,776	0.0291	3
1996 8	110,501	3,296	0.0298	3
構成比	100	3.4		

表3. 釣の漁労体出漁日数：漁獲量

1996・H8

単位：ト

区分	沿岸釣計			無動力			動力5吨以下		
	漁労体	出漁日数	漁獲量	漁労体	出漁日数	漁獲量	漁労体	出漁日数	漁獲量
沿岸鮪延縄	3	710	197						
その他延縄	336	33,066	600				308	31,035	501
沿岸鯉一本釣	4	600	734				1	150	178
沿岸いか釣	1,263	52,836	170	1	1	0	1,223	50,691	153
さば釣	2	206	20						
曳縄釣	759	26,938	608				739	25,753	529
その他の釣	3,405	256,991	3,926	12	598	5	3,181	238,299	2,850
沿岸計	5,772	371,347	6,255	13	599	5	5,276	345,928	4,212

動力5~10			動力10~20			漁船なし
漁労体	出漁日数	漁獲量	漁労体	出漁日数	漁獲量	
			3	710	197	
23	1,520	12	5	511	53	3
1	450	180	2	300	375	
37	2,038	16	1	100	0	1
			2	206	20	
18	1,065	43	2	120	36	
172	13,523	328	27	4,571	730	13
251	18,596	579	42	6,518	1,411	17

材料は一本釣では幹糸が麻糸，針金，天秤釣はモウソウ竹あるいは鯨髭など，重りは鉛製，チモトは麻糸または天然テグス等であった。延縄では麻縄の太いものを使用した。

1950年代（昭25～34年）後半の調査によると，漁具はその規模構造を保っているが，材料が綿糸に代わり，セキヤマをして柿渋やカッチで染めていた。徐々にナイロン道糸も現れつつあった。延縄は大半が綿糸であったが，漁具自体が次第に廃れつつあった。

曳縄では綿糸またはラミー糸とワイヤーを利用して，曳航用の縄には適当な重さの鉛のびしを打って魚群の遊泳層に合わせるよう工夫した。潜水板と称し幌用抵抗板が考えられ，深く潜るように調整に苦勞する時代であった。さば跳ね釣の漁法が屋久島沖合に展開し，不夜城を呈したのもこのころである。

その後，タイのかぶし釣や，サバのハイカラ釣，改良ぶり釣等導入が図られ，一時的に好況だったが永続しなかった。一本釣に枝糸を出し，多くの釣り針を付ける立て縄漁法の試み（かじきびん玉流し釣）や延縄にさらに枝糸を付け，多くの釣を付けて立体的に操業する工夫も行われた（瀬戸内漁協の深海立延縄）。

その他釣り糸，揚縄機の開発，機械化などで遊漁者の増加と漁具屋の進出が進んだ。しかし最新の漁具は漁業者には手の届かない存在となり，経済性を追求する漁民は，一種の公害にも似た怒りを感じるようになった。自動いか釣機のように機械に依存するのではないこの漁法は，漁業者個々の力を試すことにもなる。

県水産専門技術員をした四元賢治は，実際の漁具を調査，収集し，旧来の漁具39点，先進地漁具などとともに漁業研修所に展示している。

即ち釣漁業は経験（勘）と技術（こつ）との勝負であるが，後継者が減っている現在，将来に危惧を感ずる。遊漁者の進出が著しく，漁業者との調和が課題となってきた。

2. 漁業技術の発達

1) 魚種並びに漁業種の漁具の推移（瀬もの一本釣などで述べたものは除く）

約百年の釣漁業の推移は次の表の通りである。伝統的な技術，漁法の流れは，現在も失われていない。

「海幸，山幸」の生活基盤を保って来た大和民族の生きて来た証左であり，にわかに変更出来るものではない。技術革新によって漁具の発達はあっても魚の習性までは変えられない。

以下の表では，百年の変化の中で高級魚指向が進み，捕る魚が増加したこと，技術が多様化したこと，一方資源が減少したものは減び，人の好みに合わせて漁具も変化したことが分かるであろう。

(1) 漁業推移表 一本釣

(地名は各漁協)

魚種	1903 (明36) 年ごろ	1955 (昭30) 年ごろ ³⁾	1996 (平8) 年	主な漁場
タイ		たい一本釣 (長島, 垂水, 知覧) ゴム引き釣 (大根占)	たい一本釣 (里, 野間池, かいえい) たいかぶし釣 (阿久根, 上甌) たいたぐり釣 (阿久根, 山川)	全県一円
イトヨリ	こだい手釣【甘鯛】 (内之浦, 申木野) 赤魚 (あかふ) 釣 (志布志)	いとより手釣 (申木野, 笠沙) 合切釣 (大根占)	一本釣 (申木野, 笠沙)	

魚種	1903(明36)年ごろ	1955(昭30)年ごろ ³⁾	1996(平8)年	主な漁場
サバ	さば釣具(片天秤釣, 屋久島 宮乃浦) (両天秤釣, 山川)	さば一本釣 (両天秤釣, 串木野) さば跳ね釣(串木野)	さば一本釣(一湊) さば一本釣 (昼釣, かいえい)	上屋久釣沖合, 坊津沖合
フグ	ふぐ釣具(市来)	ふぐ手釣(東市来)	引っかけ釣(かいえい)	
ブリ・ヒラス	ぶり合切釣(山川)		ぶり一本釣 (活魚利用, 野間池)	
アジ	あじ一本釣 (片天秤釣市来)	むろ手釣 (大根占, 根占)		
イカ	いか釣具 (山川, 江口)	いか一本釣(上甌) あおりいか釣(鹿児島)	夏いか釣(阿久根)	
タチウオ	たちうお釣具 (両天秤釣, 福山)	たちうお手釣(垂水)		
ハガツオ	はがつお釣具 (片天秤釣, 山川)			
マグロ	まぐろ釣具(坊泊)			
シイラ	しいら漬漁法 (甌島 蘭牟田)			
サワラ	さわら釣具・だまし釣 (大島龍郷, 笠利)			
エソ	えそ釣具(山川)			
スズキ	すずき釣具 (片天秤釣, 串木野)			
カマス	かます釣具 (片天秤釣, 東申良)			
ガツン	がつん釣具(片天秤釣 東南方村)			
キス	きす釣具(市来)			
アラ	あら手釣(串木野)			
ホタ・チビキ		ほた釣(七島灘)	きほた釣 (野間池, 瀬戸内)	
カサゴ		ぶら下げ釣(知覧)		
ソウダカツオ		めじか竿釣(笠沙)		
タコ		たこ手釣(大根占)	たこ釣(東町)	
キダイ			きだい1本釣 (串木野, 上屋久町)	
イサキ			いさき一本釣 (東町, 野間池) 夜焚(下甌)	
カマス			かます一本釣(笠沙)	
ヒラメ			ひらめ一本釣(阿久根)	

(2) 延 縄

魚種	1903(明36)年ごろ	1955~64(昭30年代)	1996(平8)年	主な魚種, 漁場
タイ	たい延縄(串木野)	たい底延縄(串木野) たい大縄(大根占)	まだい延縄(秋目, 佐多 岬, 鹿児島, 串木野)	鹿児島湾, 南薩 西薩沿岸
コダイ	こだい延縄(市来)	れんこ鯛延縄(大根占)	れんこ鯛延縄(市来, 串木野市島平)	あこだい, 西薩沿岸
フカ	ふか延縄(谷山)			南薩, 大隅半島南岸, 志布志湾, 屋久種子
ブリ	ぶり延縄(串木野)		ぶり延縄(野間池)	西薩・南薩沿岸

魚種	1903(明36)年ごろ	1955~64(昭30年代)	1996(平8)年	主な魚種, 漁場
パシヨウカジキ	秋太郎延縄 (申木野, 根占)			鹿児島湾口, 甌海峡
ニベ	にべ延縄(東申良)	にべ底延縄(東申良)		志布志湾
アラ	あら延縄(東南方)			南薩沿岸, 種子, 屋久
パイ	ばい網延縄(山川)			鹿児島湾口, 志布志湾
サバ		さば延縄(谷山)		佐多, 屋久沖合
トビウオ		とびうお延縄(種子島)		種子島東沿岸
エソ		えそ延縄(鹿屋)		鹿児島湾
ハモ			はも延縄(東町, 島平)	不知火海, 西薩沿岸
トラフグ			とらふぐ延縄(阿久根)	長島沖合, 志布志湾

(3) 曳縄

魚種	1903(明36年)	1955~64(昭30年代)	1996(平8)年	主な魚種・混獲物・漁場
ブリ	幌(ほろ)曳き具 (申木野)	ぶり曳縄(笠沙)	ぶり・ひらすゴム曳縄(種子島), ぶり・ひらす曳縄(里, 種子島) ぶりテンテン曳縄(里)	ハガツオ, マグロ, 南薩, 西薩 種子島, 甌島の沿岸
サワラ		さわら曳縄釣(笠沙)	さわら曳縄(江口, 喜界島) さごし曳縄(笠沙, 志布志)	サゴシ, 南薩, 西薩沿岸, 大島沿岸, 志布志湾
ハガツオ		はがとお羽鰹曳縄釣(笠沙)		南薩・西薩沿岸
シビ		しび・しび曳縄(額娃)	よこわ曳縄(笠沙, 名瀬)	カツオ, 南薩沿岸 大島近海
シビ		回転釣(額娃町大川)		カツオ, 南薩沿岸
マグロ			ジャンボ曳縄(種子島, 名瀬, 瀬戸内)	キワダ, カツオ, サワラ, 種子・屋久島, 大島沿海
カジキ			かじき曳縄(喜界島)	カジキ類
ヒラメ			ひらめ曳縄(市来町)	エソ
タチウオ			たちうお曳縄(錦江, 島平)	鹿児島湾奥, 西薩沿岸
コウイカ			こういか曳縄(野間池)	

(4) 先進地漁業技術習得講習および先進地漁業技術によりもたらされた漁業

県では戦前・戦後を通じ、漁業技術の向上、先進地の技術導入を図ってきた特に戦後は県外の有名講師を招いて講習会を開き、実際の操業を指導した。また普及事業の進展に伴い、実際に先進地の視察に赴き乗船実習をするなど、技術習得に努めた。1903(明36)年の報告をもとに現在を検証しても、その基本は大方変わらず、ただその釣果を競って技術の改善を図って来たことが例える。自分の地先で、容易に、単独で操業出来ることが妙味であり、釣漁業が海面全漁業の10%の地位を保つ所以であろう。もちろん一針一尾が原則で、高生産性を得られないことが欠点であり、経験と技術がものをいうこの漁業は、趣味人口はあっても、親から子へと継承されない悩みもある。先進地の技術導入例は多く、ここではごく代表的なものにとどめる。

表4 先進地漁業導入の参考例表

漁 具 名		習 得 先 (または講師名)	
年 次	漁 業 名 称	先進地名	講 師 そ の 他
1955 (昭30) 年より前	とばせ付き曳縄釣	高知県	
〃	ぶり曳縄釣	千葉県	木村金太郎
〃	たいふかせ釣	〃	〃
〃	きわだ曳縄釣	高知県	
〃	よこわ曳縄 (バクダン・ ダンプ併用) 曳縄釣	高知県	
〃	缶流し釣	西之表	高知県から習得, 先進地となる
1960 (昭35) 年	ピン玉流し釣	笠沙町野間池	樽流し漁具の元祖
〃	小型立縄式延縄	神奈川県	底魚対象の漁業
1961 (昭36) 年	深海立縄式延縄	鹿児島水試	奄美大島が中心, 5~10 ^ト 用

(5) 釣漁具の発達⁴⁾

明治の始めから一本釣, 曳縄, 延縄のそれぞれの漁具がある。タイ, アジ, サバ, ブリ等が基調である。当時は桜島横山のがっさい釣に見られるように, たい一本釣の専業ではなく, がっさい釣として底魚を何でも釣っていた節がある。一方たい延縄では「1籠500mの幹縄に50本の釣針を付け, 5籠を一籠と称して一昼夜に4回操業して, 一挙に150尾の漁獲があった」という記録もある。当時は延縄の方が専業として栄えていたと思われる。餌はキビナゴが使用された。現在は延縄も往年の盛大さはない。遊漁者が豪華な釣具や餌を用いて釣獲するようになって様変わりしてきた。

アジ, サバについては古くからがっさい釣として, 夜釣で火光を利用して浮魚を対象に漁獲し, 両天秤釣または片天秤釣として連綿として続いている。この天秤釣はサバ以外の多くの魚種に応用され, ハガツオやカマス, スズキ, エソ等に, 使用されている。サバの延縄も佐多岬南方の三方曾根などで操業していた。昭和30(1955~1964)年代のサバ豊漁の時は屋久島や薩南海域でサバの跳ね釣が大流行したが, これも海面に浮上させるまでは天秤釣が使用された。最近は多くの枝糸に人工の毛針を付けて釣るハイカラ釣的手法も用いられ, 高能率を上げるように工夫されている。

ブリについては『鹿児島県漁業説略』によれば撒餌ぶり釣, 鰯魚配縄(延縄), 鰯魚幌釣(曳縄)がある。鰯飼付(撒餌ぶり釣)が本県独特の漁法であるが, これは別項で詳述するので省略する。

往時はぶり延縄が全盛のようで, 1籠900mの元縄に50本の釣針を付け, これを3籠使用する。1日3~4回操業, 餌はトンキュウイカを使用。「一挙30尾獲る」とある。

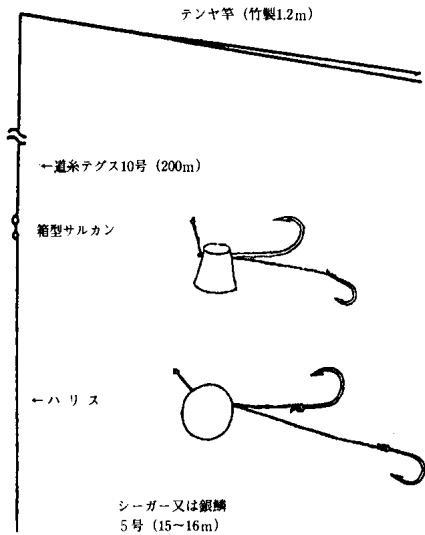
西方浦(川内市)は現在漁村としては寒村であるが, 明治(1868~1912)の初期はなかなか先進地であったように思われる。ぶり幌曳きの操業は古く, 船に本帆と帆の2柱に備後葎を張り, 速力を得ていた。45~27mの長さの幌を4本曳いており, 幌には雄鶏の羽毛を使用している。その船を二階棚舟と言ひ, 舟の長さは4.5mといわれる。あまりにも小型なので, 戦後穎娃町海岸で筆者の見た舟幅の広い「チョロ舟」ではないかと思う。漁期は11~12月, 3人乗り, 1日好漁の時30~40尾, 1尾40銭で収入も良かったとある。その後, 幌, 角をいかに餌らしく見せるか, またブリの泳ぐ水深層にいかに届かせるか, 餌を生きものにいかに見せるか等の研究が進み, 潜行板の開発, 幌かなの市販品化が進んだ。現在, 漁場は南薩沿岸に移り, 殆どが潜行板, 動力化, 省力化が進み, 魚種もマグロ, カツオ, サワラなどの大型魚種に応用されている。一方ブリの延縄はすたれた。

最近是一本釣の簡便さと、延縄の高漁獲性を組み合わせて缶流釣や深海立延縄漁法が考案されている。釣漁業の専門化を進める上から一層の漁具の開発が必要である。

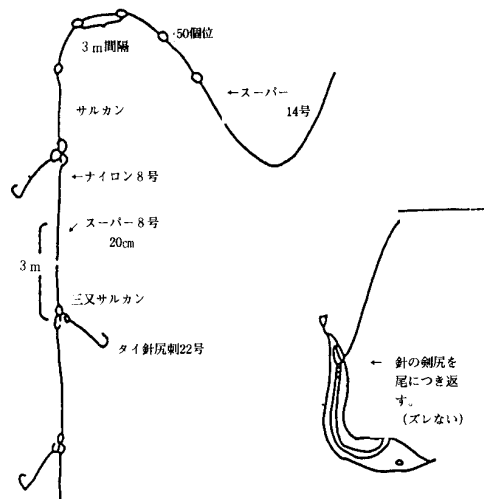
釣漁業の発展（図により推移を説明する）

ア．たい釣（たい一本釣 たい延縄）

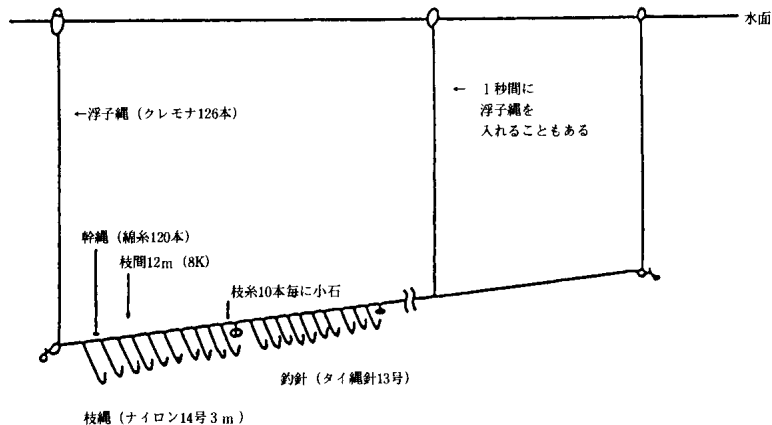
ア) てんや釣（鹿児島市漁協）



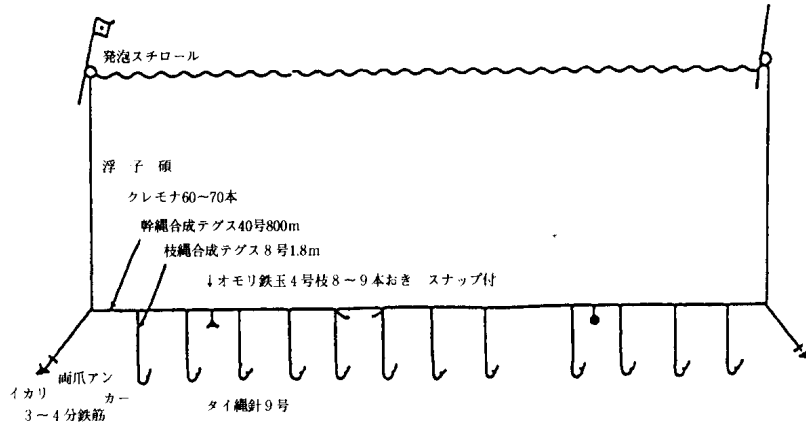
イ) たい一本釣（野間也漁協）



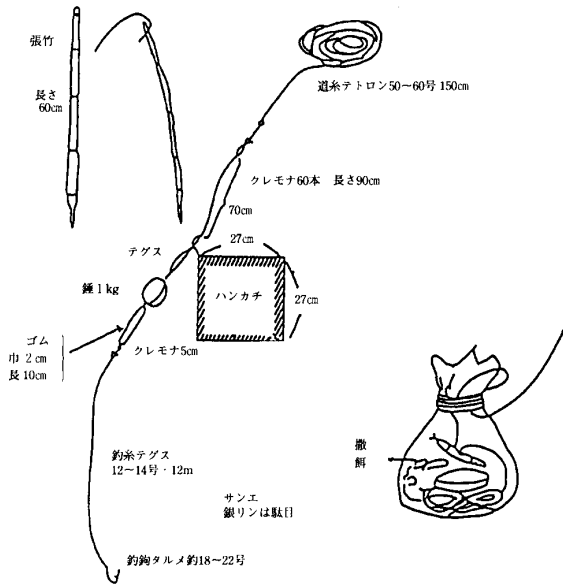
イ．たい延縄（秋目漁協）



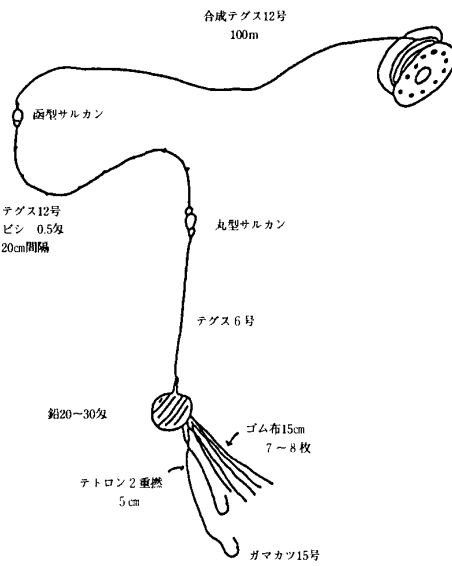
ウ．たい延縄（串木野市島平漁協）



エ．たいかぶし釣（阿久根市漁協）

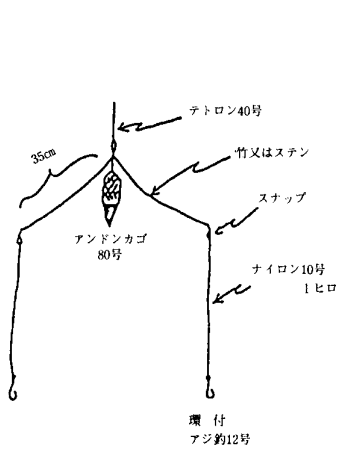


オ．タイタグリ釣（山川町漁協）

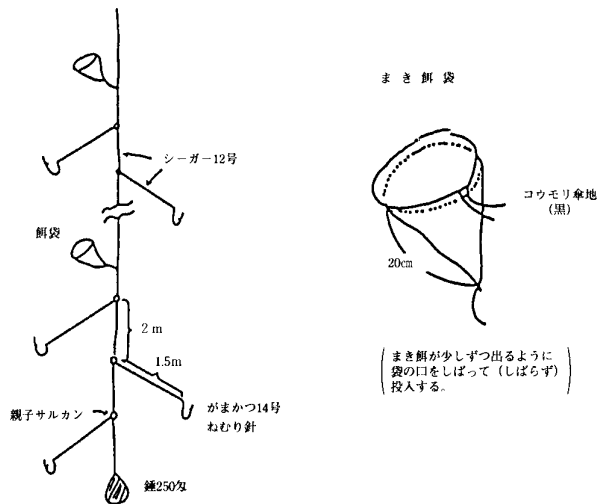


あじさば釣

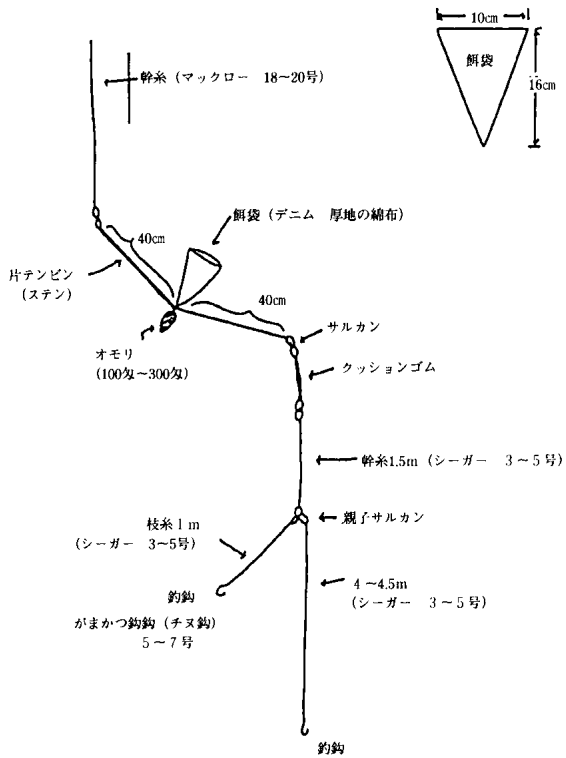
ア．さば天秤釣（上屋久町漁協）



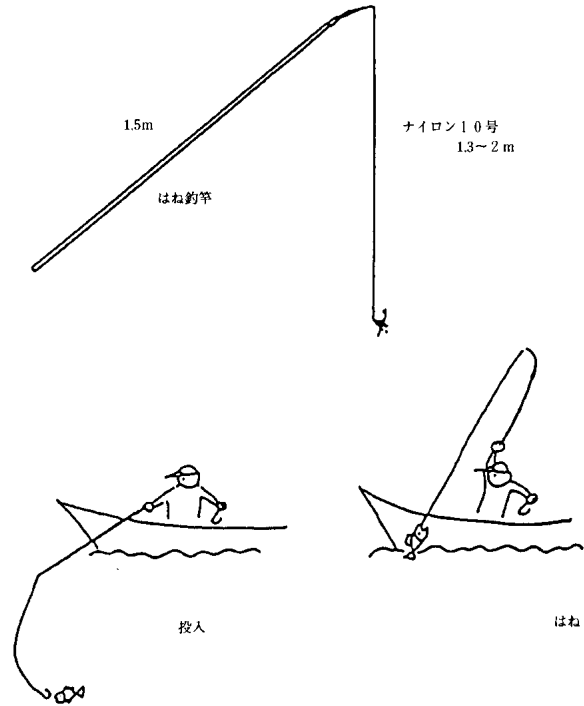
イ．さば昼釣（かいえい漁協）



ウ．あじ昼釣（野間池漁協）

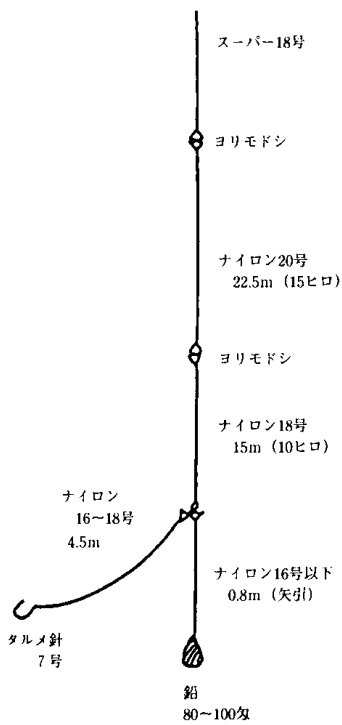


エ．さば跳釣り（上屋久町漁協）

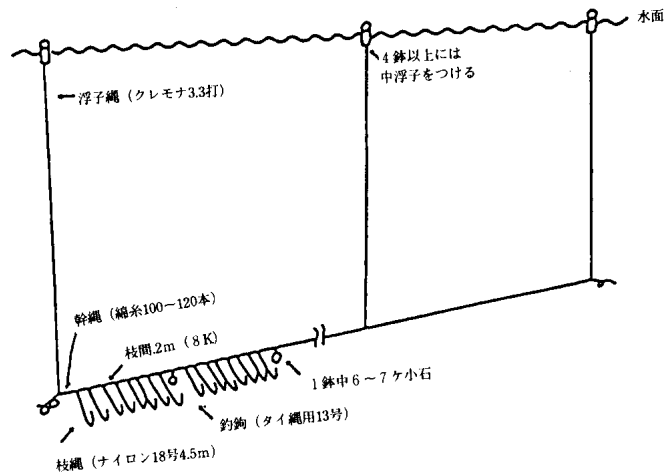


ぶり・かつお・まぐろ・さわら釣

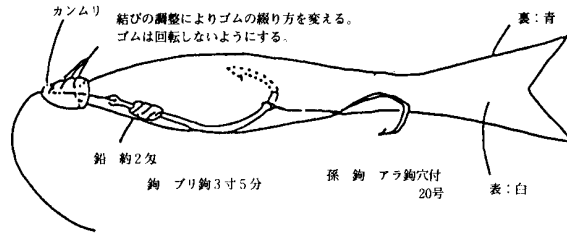
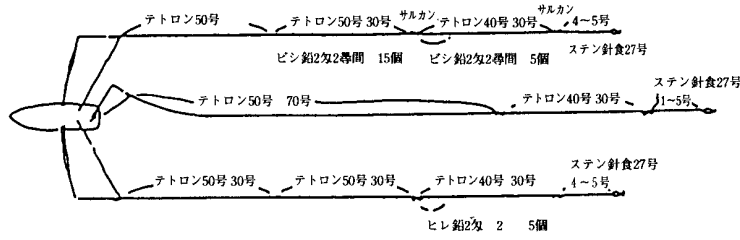
ア．ぶり一本釣（野間池漁協）



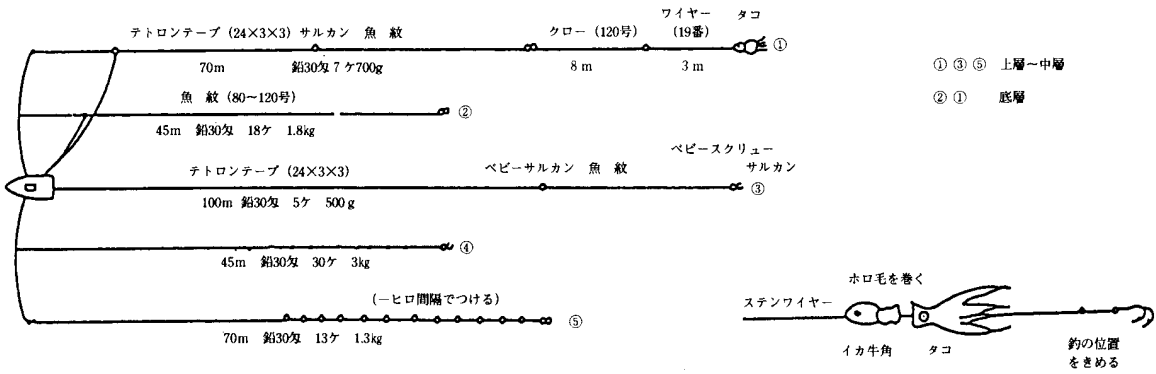
イ．ぶり延縄（野間池漁協）



ウ. ぶりゴム曳縄釣 (種子島漁協)

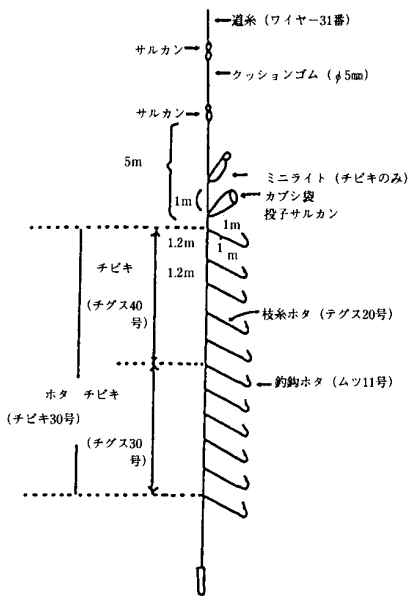


エ. さわら曳縄 (喜界島漁協)

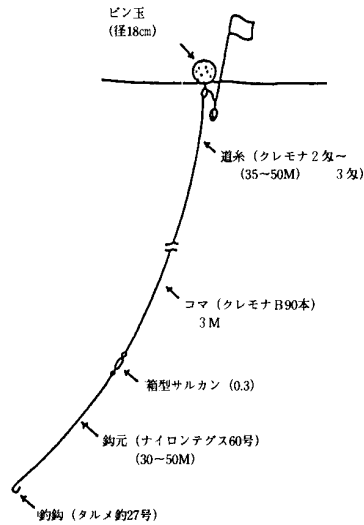


せもの立延縄 深海延縄

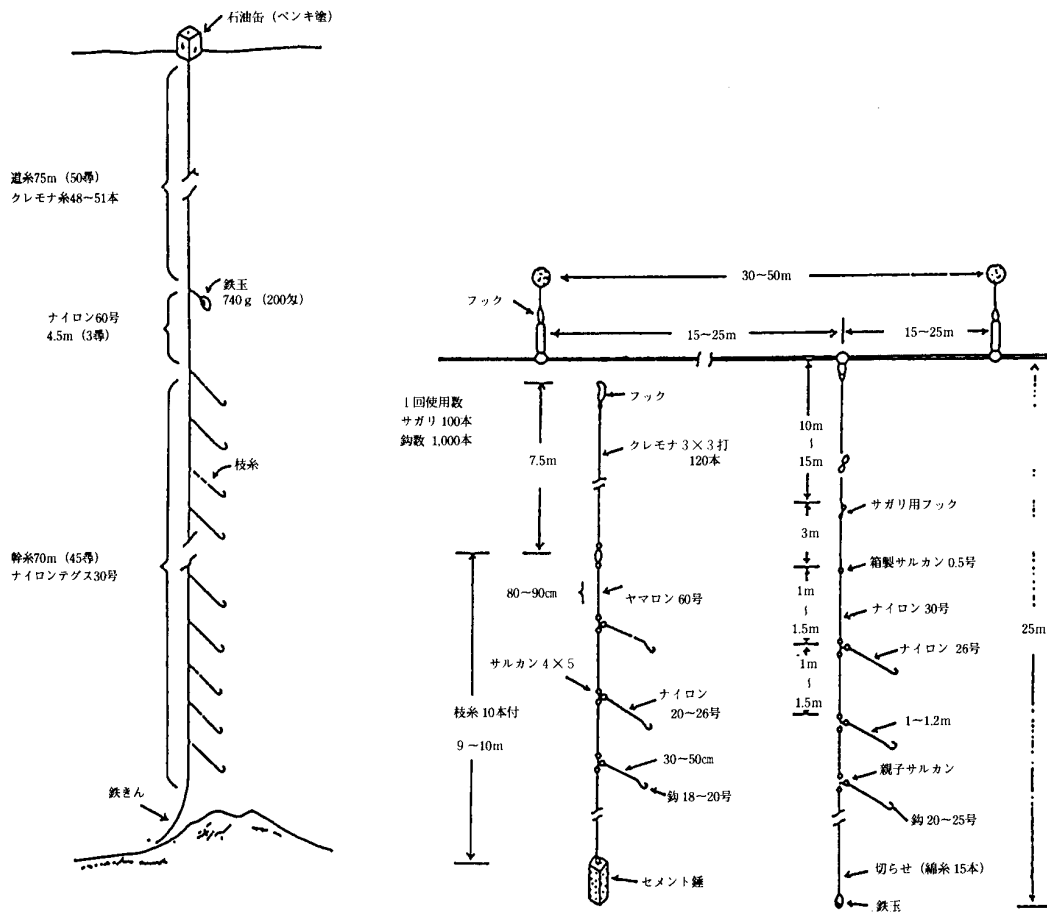
ア. せもの釣 (大和村漁協)



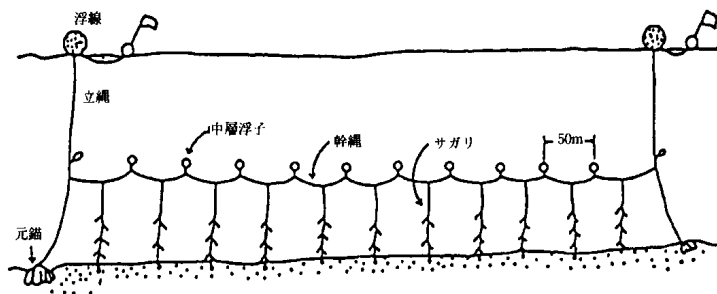
イ. ビン玉流し釣 (笠沙漁協)



ウ．缶流し釣（種子島漁協）



エ．深海せもの底延縄（鹿児島県水産試験場）



(6) 漁場・漁期

約百年前の沿岸地先の釣漁場について、当時の水産試験場報告を元に概要を説明したが、当時好漁場として栄えた梅吉曾根、三方曾根などでは、多くの魚種が衰退している。

釣漁業は単独で周年を営むことは困難で、多くの魚種を組み合わせる。したがって多くの漁業を知る必要があった。

その漁期と漁場を表示すると次の通りである(表5)。

表5. 階層別漁業の漁期・漁場表

漁船規模	漁業種類	漁期	漁場
動力船 0~5ト 5~10ト	しび・かつお曳縄	11~4月	枕崎・坊沖合, 三島沖合
	たい一本釣	タイ9~4月, キダイ9~12月	枕崎, 笠沙, 坊沖合
	みずいか一本釣	11~4月	枕崎, 坊, 種子島, 甌島沿岸
	いさき・あじ一本釣	5~9月	枕崎, 坊, 知覧沖合
	さば・いか夜釣	〃	〃
	瀬魚一本釣	アカメ・ホタ・アカバラ5~9月	宇治, 三島村・種子屋久島周辺
	ぶり・ひらす一本釣	ブリ・ヒラス9~11月	宇治, 南薩沖合
	ぶり・ひらす曳縄	10~3月	宇治, 草垣, 種子屋久, 三島周辺
	たい類延縄	タイ10~5月, キダイ7~9月	穎娃, 山川, 枕崎, 坊, 笠沙町沿岸
	ピン玉流し釣	かじき8~10月	川尻, 枕崎, 笠沙町沖合
	さわら曳縄	本サワラ8~2月, 沖サワラ8~12月	枕崎, 笠沙町, 吹上, 宇治, 三島周辺
	ひらめ曳縄	ヒラメ・タイ11~4月	笠沙町, 吹上沖合
動力船 5~10ト	瀬魚一本釣	チビキ・ホタ・イナゴ・アカメ 周年	宇治, 種子屋久, 三島, 十島周辺
	深海立延縄	キダイ・瀬物 周年	三島, 十島, 大島近海
	さば一本釣	サバ4~6月 10~12月	屋久島沖合
動力船 10~20ト	瀬魚一本釣	チビキ・ホタ・アラ・タルメ 周年	三島, 十島, 大島近海
	瀬魚立延縄	キダイ・瀬魚 周年	〃
	かつお一本釣	カツオ3~10月	種子屋久島, 大島周辺
	たい類延縄	タイ, その他 周年	南薩, 西薩, 鹿児島湾口沖合

(7) 餌料

魚を引き寄せ、食いつかせるためには、餌が必要である。魚は視覚、触角、臭覚、味覚、聴覚などで餌の適否を判定する。このため四季、昼夜、時間帯などで釣果は異なり、餌の生き・死に、動きなどでも好不漁がおこる。基本的には魚がふだん何を食べているかによるが、生き餌、死に餌など古来使用されて来た餌の他に、江戸時代既に幌引用として利用されていたかつおの擬似針も歴史は古い。最近漁具製作所で様々な製品が販売されている。主な漁業種類と餌の種類を上げるとおよそ次のとおり(表6)である。

表6. 漁業種類別餌と漁場表

漁業種類	餌の種類	使用漁場
たい一本釣	生き餌; イカ, エビ, ユムシ 撒き餌; キビナゴ, カタクチイワシ 生餌イカ; サンマ, クラゲ, カタクチイワシ	阿久根, 鹿児島湾内他
ぶり一本釣	生き餌; アジ	野間池沖合
あじ・さば一本釣	生き餌; サバ(友餌) カタクチイワシ 撒き餌; キビナゴ, カタクチイワシ あじ釣; アミ	屋久島ほか

漁業種類	餌の種類	使用漁場
瀬魚一本釣	活き餌；ムロアジ、サバ、イカ 生餌；カツオ、メチカ、サンマ、イカ 撒き餌；カタクチイワシ、キビナゴ	薩南群島
あじ一本釣	生餌；キビナゴ、イワシ 撒き餌；キビナゴ、カタクチイワシ	阿久根
みずいか一本釣	擬餌；いかな	県下一円
いさき一本釣	擬餌・撒き餌；アミ	県内各地
いとより一本釣	生餌；オキアミ、シバエビ	串木野沖合、笠沙沖合
かます一本釣	生餌；キビナゴ	笠沙沖合
ひらめ一本釣	活き餌；キス、イワシ、カタクチイワシ	阿久根沖合
けんさきいか釣	擬餌；イカスツテ5号	阿久根沖合
きだい一本釣	生餌；サンマ 撒き餌；アミとパン粉	
たい類延縄	活き餌；イカ、エビ、ユムシ 生餌；イカ、サンマ、クラゲ、キビナゴ、ナマコ その他；油付け毛糸	阿久根、西薩、南薩、鹿児島湾奥、
きだい・あまだい延縄	活き餌；エビ 生餌・沖アミ、イカ	市来、串木野沖合
あらかぶ延縄	生餌；サバの塩漬け	黒之浜
かつお・しび曳縄	擬餌；潜行板利用	笠沙、野間池、里、手打、穎娃沖
ぶり・ひらす曳縄	生餌；サンマ	佐多岬
ぶり・ひらす曳縄釣	活餌；アジ	野間池
かじきピン玉流し釣	活餌；アジ、サバ	南薩
缶流釣	生餌；カツオ、サンマ、サバ、イカ	西之表、中種子
たちうお曳縄	生餌；カタクチ、キビナゴ、サンマ、コノシロ	鹿児島湾奥、島平沖合
沖合曳縄	擬餌；かぐら幌、たこ幌、こくちようテンテン等	南島島嶼周辺

(8) 漁獲物

「農林水産統計」(1996・平8年)によると表1の通り。漁業種別ではその他一本釣が多く、沿岸かつお、曳縄、延縄、いか釣の順となっている。魚種別には表7の通り、マグロ、サバ、カツオ、タイの順であるが、仕分けされないその他魚種が非常に多い。生産量は多くないが地域特産の高級魚が釣獲されていることによる。

表7. 釣漁業の魚種別漁獲量 1996(平8)年 単位：ト 資料：農林水産統計

魚種	合	マ	カ	カ	ア	サ	ブ	タ	タ	サ	シ	イ	タ	そ
漁業種	計	グ	ジ	ツ	ジ	バ	リ	チ	イ	ワ	イ	カ	コ	の
		ロ	キ	オ	類	類	類	ウ	類	ラ	ラ	類	類	他
沿岸まぐろ	197	167	29											
その他延縄	600	37	8	2				191	45					317
沿岸かつお	731	352		358							22			
沿岸いか釣	470											470		
さば釣	20					20								
曳き縄釣	608	283	7	41			14	104		56	56	17		30
その他釣	3,926	162	4	85	248	421	220	97	456	11	61	100	31	2,030
合計	6,552	1,001	48	486	248	441	234	392	501	67	139	587	31	2,377

(9) 経営事例

釣漁業の経営事例を上げると次の通り(表8)である。漁業者1~2人で、専業として経営した好事例である。

表8 1982(昭57)年一本釣経営事例

県水産課

漁業種類	漁船	漁場	魚種	水揚トン数	金額	大仲経費	粗収益
一本釣 延縄	4.15 ^ト 45馬力	種子島, 鹿 児島湾口 2人乗組	チビキ, ホタ タイ	3.0 ^ト 0.7 ^ト	4,400千円	1,480千円	2,700千円
瀬物一本釣	4.48 ^ト 45馬力	屋久島沿岸 2人乗組	ムツ, チビキ ホタ, タルメ	6.8 ^ト	8,700千円	1,944千円	6,321千円
瀬物一本釣	3.05 ^ト 25馬力	大島近海 1人乗組	ホタ, チビキ ヒメダイ	7.25 ^ト	11,320千円	3,068千円	6,648千円

3. 問題点と今後の課題

1) 問題点

本県沿岸漁業の地位は表9に示すように漁労体, つまり操業隻数からは実に52%を占め, 就業者も30%で零細経営層が多い。1948(昭23)年の釣漁業の漁獲高を見ると, タイ, サメのほとんどがたい一本釣と延縄である。

制度的には自由漁業で, 誰でも参加出来るので, 戦後の復員者, 引揚者など職のない人々を吸収していったことが考えられる。

高度経済社会が出現したことで, 漁業後継者は次第に減り, 現在の就業者は高齢化している。この中で人々の需要も高級魚へと移った。そうなれば地先の高級魚を選別して漁獲するしかなく, それは釣漁業においてない。

戦後多くの人々に職を提供した釣漁業も最近では唯我独尊的な遊漁者の出現で様相を異にしている。専業の漁業者も遊漁者を漁場に運んだり観光船化するなど第三次産業化が進んでいる。限られた海洋資源であり, 両者の協調が必要であろう。

2) 今後の課題

(1) 沿岸資源の維持培養

釣漁業の多くは沿岸地先で操業している。魚付林の伐採や乱獲など人為的な原因で失われた漁場は多く回復が待たれる。幸いに人為的な原因であれば人為的な改善も可能であろう。漁業者だけでなく, 一般住民とも協調してその努力をすべきである。

(2) 遊漁者との協調

遊漁者が新しい産業構造の中に組み込まれようとしている。これまで乏しい資源を大事に守って来たのは漁民である。この中に遊漁という新規産業が組み込まれると, 狭い漁場が一層狭くなるのは必至である。狩猟や河川では放鳥, 放流などが行われ, その資源維持に努めている。沿岸の場合, 自然資源の回復力は山や川よりも強い。「転ばぬ先の杖」の諺通り, お互いの協調で末永い資源維持の努力が必要である。

(3) 漁業技術の向上

釣漁業は今後も多様化が進むと思われる。高性能の漁具も一時的で, 持続性の無い場合がある。

表9. 沿岸釣漁業の占める地位 1996(平8)年

項目	県計	沿岸釣	割合
漁獲量	11,199 t	5,772 t	6%
漁獲金額	32,417千円	3,207千円	10%
就業者	11,936人	3,525人	30%
漁労体	11,199体	5,772体	52%
出漁日数	697,300日	371,347日	53%

自由漁業であるので、他との競合もある。常に周囲の情勢を見極めながら、漁業者としての意識高揚を図る必要がある。

4. 参考文献

- 1) 鹿児島県漁業概略(1883): 釣鉤真知, 鹿児島県勤業録編述, 24~71.
- 2) 鹿児島県水産調査報告(1903): 各論 重要漁場, 鹿児島県水産試験場, 明治36年, 84~108.
- 3) 鹿児島県漁具図譜(1955): 釣の部, 鹿児島県水産課, 5~78.
- 4) 鹿児島県の漁具漁法図集(1982): 一本釣り他, 鹿児島県水産課, 2~129.

(福元 覚)